

## ウィリアム・ブレイク『無垢の歌』の題扉

### —その図像と解釈に関する考察—

安永幸史

#### はじめに

本稿はウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757—1827) の『無垢の歌』(Songs of Innocence, 1789) の中でも題扉の意味解釈をめぐる考察である。『無垢の歌』は、彩飾本とよばれる彼の一連の作品の中でも最初期のものに当たる。その意味解釈に関しては、既に英米文学の分野から多くの研究が存在している。一般的にはブレイクの個人的なヴィジョンの世界、原罪以前の理想的な世界を読み込んだものと見なす解釈が主流であるが、同時代の「子どものための聖歌」との形式的類似を考慮に入れた上で、その児童書で表現された道徳形態への反発という意図を読み込む意見も存在している。

しかし、それらの研究の多くにおける『無垢の歌』の絵画的要素に関する考察は、いささか不十分であるのが現状である。この傾向は、『無垢の歌』の題扉(挿図1)の解釈においても同様である。

『無垢の歌』の全体としての主題をめぐる議論においては、冒頭にあるために、「序詩」や口絵が引き合いに出されることが多い。一方、題扉は口絵や「序詩」とともに『無垢の歌』の冒頭に存在し、読者の目に初めに止まる箇所の一つであるにもかかわらず、詩的内容と結びつけにくいいためか、その意味に関しては、集中的な研究がなされているわけではない。しかしながら、題扉は初めに読者の目に止まる部分である。そこにはブレイクによる明確な作品規定が絵画的に込められている可能性は十分にあるだろう。このような考えから、本稿では、『無垢の歌』の題扉に着目しながら論を進めていきたい。

#### 一 研究史と問題設定

『無垢の歌』はブレイクの自作の詩に自身の手で挿絵や装飾をほどこすという形態をとっており、いわゆるブレイクの作品の中でも

彩飾本と呼ばれる部類のものである。「彩飾本」(illuminated books)はブレイクが自ら考案した、通常のエッチングとは逆に線描として残す部分を耐酸性の薬物で覆い、その後に版面全体を腐食するという方法で版を形成した凸版腐蝕印刷法である「彩飾印刷法」(illuminate printing)を用いて刷り上げられており、多くは水彩絵具で彩色がほどこされている。

『無垢の歌』は全三十一頁で、その内訳は口絵一頁、題扉一頁、本体二十九頁で構成されている。<sup>(2)</sup>この全三十一のプレートのおおきに、テキストには自作の挿絵がふされている。絵の題材は、幼児や子羊、小鳥など全体に牧歌的な雰囲気漂うものが多い。テキストと挿絵の関係に言えば、「こだまが原」や「笑いの歌」などのようにテキストと挿絵が画面と分かれたものや、「花」などのように、テキストと絵の人物がほとんど融合したようなもので様々である。<sup>(3)</sup>またテキストの多くには植物をモチーフとした装飾が施されているのも特徴である。詩に関して言えば、挿絵と同じように子どもなどを主題としたものが多く、語句も平明である。ただし、子どもを主題としたものでも「聖木曜日」や「煙突掃除の少年」などのように貧困層の子どもの状況などを反映した社会性の強いものなども存在する。

『無垢の歌』の題扉(挿図1)には「1789」との年紀がある(挿図2)ことから、この作品はその前後に制作されたと考えられるが、正確な制作期間はわかっていない。また、後に『経験の歌』と合本して制作された『無垢と経験の歌』には『経験の歌』のみで構成されている版が含まれており、また、『無垢の歌』単体での制作は、ブ

レイクがこの世を去る直前まで続いたことも明らかにされている。<sup>(4)</sup>このことから『経験の歌』が作られた後の一七九五年頃に『無垢と経験の歌』として『経験の歌』との合本版が作られ、その後『無垢の歌』単体での制作と『無垢と経験の歌』としての制作が並行してなされるようになったと見なされている。

『無垢の歌』はその「序詩」において制作の発端が幻視的性格を帯びたものとして語られ、また口絵(挿図3)においても、その内容の図解のような情景が示される。それ故、その全体的な主題は、ブレイク独自のヴィジョンの世界、経験による墮落以前の世界を歌ったものとする解釈が一般になされている。一方、同時代の社会、文学、出版状況との関係の中から主題解釈を行おうとしている試みも、多く存在する。

そのような研究の例として、ピントは『無垢の歌』所収の詩ブレイクの詩をアイザック・ウォッツ(Isaac Watts, 1674—1748)の『少年少女のための賛歌』(Divine Songs Attempted in Easy Language for the Use of Children, 1715)の「第十三歌」などと比較し、形式や題材といった点で多くの類似点があることを認めながらも、「ブレイクは、もはや子どもに大人の道徳観を植え付けようとはしておらず、想像上の共感を持って小さな、困惑するような子供の世界へ入っていかうと試みている」とその子どもへの視点を特徴づけている。<sup>(5)</sup>その上で、内容面に関してはウォッツに見られる「旧約的な峻厳な道徳律」<sup>(6)</sup>への応答としてその関係を解釈している。このような研究は他にもあり、イングラッドはブレイクとジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628—88)やチャールズ・ウェズリー

(Charles Wesley, 1707—88)、アンナ・レティティア・バーボールド (Anna Laetitia Barbauld, 1743—1825、以下バーボールド夫人と記す) などの著作を比較し、ウォッツやバニヤンなどに見られる恐怖に訴えかける部分や、バーボールド夫人のような道徳的訓戒はブレイクには見られないとした。<sup>7)</sup>

これらを踏まえた上で、シュリンプトンは、「無垢の歌」を子どものための聖歌のパロディとして位置づけ、ブレイクの『無垢と経験の歌』における、ブレイクの関心が庇護と抑圧との関係にあるものとして解釈を進めている。<sup>8)</sup> シュリンプトンは、『無垢の歌』を、「ブレイクは当時一般的だった形式(訳注…子どものための聖歌)を模倣することで、そのパロディ化を行っている」ものとして扱っている。<sup>9)</sup> 例えば、「笑いの歌」などに見られる喜びの態度が、伝統的な子どものための聖歌とは異なり、説教や道徳的な態度としての喜びのモデルを示すものではないことを指摘し、「『旧約の峻厳なモラル』や『罪と贖い』を削除している」としている。その上で、『無垢の歌』の基本的な性質に関して「ブレイクの詩は子どもたちに自分自身の本能が大人の教訓よりも優れたものであることを信じるように奨励している」点で、他の同時代の子どものための文学とは異なるとしている。すなわち、同時代の児童書をパロディ化することによって、その慈善の裏に隠された旧約的、かつブレイクからすれば抑圧的な道徳観を浮き彫りにし、疑義を差し挟むという意図が込められているというのである。

これらの研究は、もはや定説とも呼べるほどに一般化している。実際、詩的形式という点からの解釈としては、十分な妥当性がある

と言つて良いだろう。しかしながら、解釈の際にブレイクの絵の持つ要素に関する関心がほとんど払われていないか、払われたとしても印象論的な解釈にとどまっているという点には難がある。先にも述べたが、『無垢の歌』の全体としての意味をめぐる議論においては、冒頭にあるために、「序詩」や口絵が引き合いに出されることが多い。『無垢の歌』の基本的な主題を、ブレイク独自のヴィジョンの世界を歌ったものとする解釈は、「序詩」とその絵画化と見られる口絵を基本にしている。一方で題扉は、口絵や序詩と同じく、初めに読者の目にとまる冒頭に位置しているにもかかわらず、その図像が『無垢の歌』の中のいかなる詩句とも直接的関係を持たないように見えるためか、意味内容に関しては重視されていない。あえて言うならば、リンカーンは、題名を縁取る木に実がなっていること、当時の児童書に子どもに物事を教える大人の像が多く描かれたことを挙げて、「この木の実の存在が、同時代の本に登場する子どもをエデンの園の神話に結びつける」と述べ、ここに「教育」と関連した上での「経験」への萌芽と同時代の児童書との関係性を指摘している。<sup>10)</sup> しかし、その指摘はあくまで補足的かつ漠然としたものにと止まり、題扉の明確な意味規定を行うに至っていない。しかし、題扉というその位置付けから言つて、その頁においても、ブレイクが自作の定義を明確に行っていた可能性は十分に考えられる。そこで以下では、ブレイクの用いた図像源泉を踏まえた上で、題扉とブレイクの時代との関連性を浮かび上がらせたいと思う。

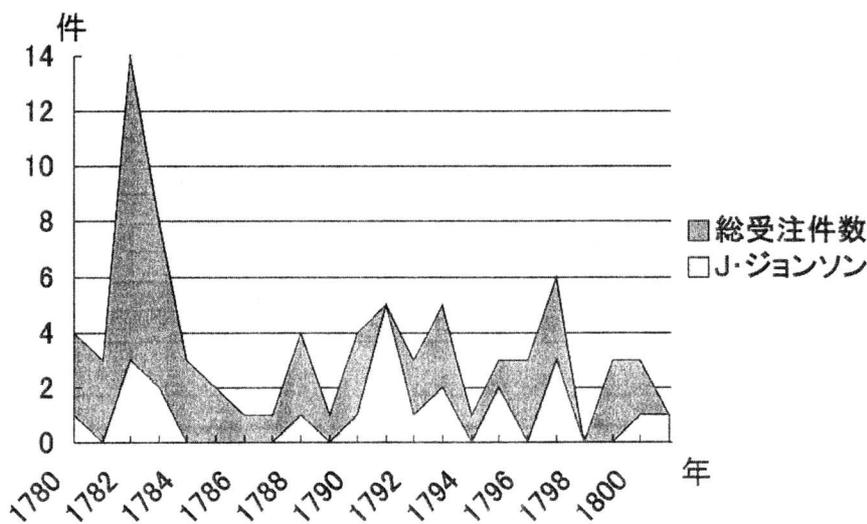
## 二 『無垢の歌』の制作環境

まずは『無垢の歌』題扉の年紀に注目しよう。題扉には、先にも述べたように、「1789」との年紀がある（挿図2）。『無垢の歌』には一七八七年頃にかかれたと考えられるブレイクの風刺詩劇『月中の島』(Island in the Moon, 1787) にでてくる三篇の詩が含まれている<sup>11)</sup>ことから、詩の制作年はその前後から始まり、その後彫版が行われたと見られる。すなわち、無垢の歌の彫版期間は長く見積もっても一七八八年から一七八九年の間と言うことになる<sup>12)</sup>。

一七八九年前後のブレイクの周辺状況で注目すべき点は、出版者であるジョセフ・ジョンソン (Joseph Johnson, 1738—1809) との関係である。ブレイクは師匠であるジェイムズ・バサイア (James Basire, 1730—1802) のもとでの修行を終えた後、複製銅版画師として生計を立てている<sup>13)</sup>。そしてこの時期は複製銅版画の制作の他、いくつかの出版者からの依頼で挿絵彫版の仕事をも請け負っていた。一七八〇年代の十年間で関わった出版者の数は多いが、一七八九年前後は、特にジョンソンとの関係が密接になり始めた時期と言える（別記の表も参照のこと）。

ジョンソンとブレイクの関係は、一七八〇年の時点で始まっている。まず一七八〇年から一七八三年までの四年間に計六つというペースで、一七八四年以降一七八八年まで多少間が空く期間がある。データを見る限りではこの時期は、工作上それほど親密な関係を持っていたとは言えない。しかしながら、一七八八年にヘンリー・フューズリ (Henry Fuseli, 1741—1825) 訳のラファター『箴言集』

表 J. ジョンソンからの商業用版画の受注件数の推移



の挿絵彫版（原画はフューズリ）の後は、ジョンソンからの仕事の受注量は激増し、一七九七年までは平均すると約一年に二つ、特に一七九一年はジョンソンがらみの仕事しか受注していないほどである。このようなことから、ジョンソンとは遅くとも一七八八年以降一七九〇年代にかけて、仕事の上で親密な関係にあったと言える。

このジョンソンとブレイクとの関わりは、ジョンソン主催のサークルとの思想的関係という観点で、指摘されてきたことではある<sup>15)</sup>。ただ、この時期のジョンソンの出版業に目を向けてみると、「一七八〇年代には児童書を集中的に出版しようとしていた」というジョンソンによる指摘が存在するほどに、児童書の出版が多い<sup>16)</sup>。

タイソンによる調査によると、出版内容は、ジョン・ボニーキャッスル (John Bonycastle, 1750?—1821) による地理学の学校教

材から、教育論や読み物としての児童書など多岐にわたる。特に読み物としての児童書はメアリー・ウールストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759—97) 、バーボールド夫人、サラ・トリマー (Sarah Trimmer, 1741—1810) など多くの作家を擁していた。<sup>17)</sup>

この児童書出版へ重点を置いたという事実は、『無垢の歌』の制作環境を考える上で非常に重要なこととなる。『無垢の歌』が、その詩的形式などの点から、当時の児童書と比せられることは先にも述べた。また、ベンジャミン・ヒース・マルキン (Benjamin Heath Malkin, 1769—1842) による一八〇六年の『無垢の歌』へのコメントにおいても、『無垢の歌』の詩的言語をウォッツと比べる下りがあり、<sup>18)</sup> 同時代的にも『無垢の歌』と当時の子どものための聖歌との形式的類似が意識されていた様子が伺える。その意味で、ジョンソンの児童書出版は『無垢の歌』の制作環境として重要視されるべきと思える。

では、ジョンソンの児童書はどのようなものであったのだろうか。当時の児童書の基本的な状況として、子どもに道徳的な教育や理性的な傾向を植え付けようとするといういわゆる「教訓派」とでも言うべき児童書の趨勢が挙げられる。<sup>19)</sup> 基本的にはジョンソンの出版した児童書も、当時の趨勢に漏れず、子どもの楽しみのためといった風よりは、より教訓的なものが多かったと考えられる。

当時の児童書の一般的傾向の好例としては、先に出たアイザック・ウォッツが挙げられる。彼は自著の冒頭において、

次の世代の知恵と幸福は、あなた方の手回しと指導にゆだねら

れているのです。この世における不幸や幸福の種は往々にして非常に早くまかれるものです。だからこそ、子どもたちの心を徳 (Virtue) や宗教の傾向に導く何某かが、まず何よりはじめにあなた方から提供されるべきなのです。

アイザック・ウォッツ

『少年少女のための賛歌』より (一七一五)<sup>20)</sup>

と述べている。この言明においては、まず「次の世代の知恵と幸福」に果たす親の指導の役割が述べられる。そして、次に続く一連の部分でその指導が早い内に行われるべきであると言うことが述べ立てられた後、それを直接受ける形で、かつ文脈上子どもたちの幸福や役立つものという位置づけを担って、子どもたちの心に宗教的傾向ないしはそれに即した道徳を与える必要性が説かれる。この言明からは、同時に子どもたちへの宗教的道徳などの教え込みが非常に重要なこととして語られている様子がうかがえる。

これに対し、この時期のジョンソンにとって重要な作家の一人であるサラ・トリマーは、出版元はジョンソンではないが、一七八九年にウォッツの『少年少女のための賛歌』に対する注釈を著している。<sup>21)</sup> その「広告文」中で彼女はウォッツのことを、「子どもの宗教教育に対し非常に大きな貢献をした」と、啓蒙的な面から非常に高く評価している。

他にもジョンソンのサークル内でブレイクと近い関係にあったとされる人物として、バーボールド夫人とメアリー・ウールストンクラフトがいる。彼女らもそれぞれ児童書を書き上げ、ジョンソン

を出版元として出版していた。

バーボールド夫人は一七八一年出版の自著の中で、次のように述べている。

子どものためにしつらえられた本が数多あるなか、いくつかは、非常に理性的な概要を持ち宗教上の教義を要約的に伝えている。

バーボールド夫人

『子供たちのための散文の賛歌』「序文」より（一七八一）<sup>(24)</sup>

上記の発言はバーボールド夫人の論点を明確にしている。同時代の児童書について語るに当たって、柱として置かれているのが「理性的な概要」「宗教的な教義」である。このことは、バーボールド夫人における関心の所在の一端が、理性教育、道徳教育という点にあったことを示唆している。また、彼女はこの後の項目において、「この出版物の特徴的な構想は、献身的な感情を幼児の心にできる限り早く植え付けることにある」と、自著の目的を披瀝している。これらの部分において、彼女が子どもの教育というものに関して理性や道徳という語とともに語っているということは、注目すべき事実である。それは何より、この時代における啓蒙的な児童書の目的を、バーボールド夫人がそのままに受け入れていたことを意味しているのである。

ウールストンクラフトもまた、『実生活物語』の序文において、「物語は道徳を示すために書かれた」と、自著の目的を述べている。

これ以前においても彼女は、自著に関して、次のように書いている。

この対話編と物語は現在の社会の状態に対応している。著者はそれらの持つ問題を理性―それは子どもの心には根付いてはいないだろうが―によって解決しようと試みている。良い習慣というものは気づかないほどゆっくりと身に付くので、理性を教え込むには非常に望ましいものである。

メアリー・ウールストンクラフト

『実生活物語』「序文」より（一七八八）<sup>(27)</sup>

この解説では、作品の目的として理性的な教育を挙げている。そして、それらを子どもに植え付けるために良い習慣なるものが重要である旨を述べる。こうした傾向から見ても、彼女の著作の道徳教育、理性教育を重視する傾向は十分伺えるだろう。

以上のように、『無垢の歌』の制作前後のブレイクの周辺には、教訓的な児童書の出版に熱心な出版者の存在があった。この時代の児童書の趨勢は、子どもに啓蒙的な教育を施そうとするいわゆる「教訓派」であり、ジョンソンの出版傾向はそれ自体では特筆すべきものではない。しかし、それが『無垢の歌』の制作年前後からブレイクと親しくなり始めた出版者の出版傾向であったということからは、注目に値する。先に述べたように、『無垢の歌』は形式上、当時の「子どものための賛歌」と類似性を持つ。ならばその制作にあたってブレイクの身近に存在していた児童書の傾向は、ブレイクが

もつとも敏感に反応したものであると言えるだろう。

### 三 『無垢の歌』の題扉と「教育」の擬人像

以上を踏まえ、ここからは題扉の図像に注目しながら、『無垢の歌』の解釈を進めていきたい。『無垢の歌』の題扉には、植物をアレンジした書体で作品名が書かれ、その下に一群の人物像と一本の木が描かれている。左には椅子に腰掛けた女性がおり、その周りに子どもが二人描かれている。女性は膝の上に本を広げ、その頁を指さしている。子どもたちは、その頁をのぞき込んでいるように見える。

この図像はと同様の構図を持つ人物像は、ブレイクのノートにも見られる(挿図4)。この図像は、その前後の頁のエンブレム風のデザインと同様の描かれ方をしていることから、彼の弟が死んだ一七八七年から一七九二年の間に創られたエンブレムのシリーズであると考えられる。ただしこの後の頁に『無垢の歌』の最後の詩の下書きと見られる素描があること、そして題扉とこの素描の類似性から、フィリップスなどのようにブレイクの『無垢の歌』の題扉の草稿と見なすことには一定の妥当性があるだろう。<sup>28)</sup> また、このようにエンブレムブックのデザインと同様の描かれ方をしているということから、ブレイクはこのデザインを一定の意味を担うエンブレムのなものとして扱っていたと考えられる。

この題扉に描かれた人物像の図像源泉としては、「教育」(education)を表す擬人像(挿図5)が考えられる。一七七九年出

版のリチャードソンによる『イコノロジー』には以下のような記述が見受けられる。

それ(教育の擬人像・論者注)は、子どもに本を読ませる婦人の姿で表される。彼女は黄金の錫杖を持ち、神の恩寵が教育にとつて不可欠であることを示すよう、輝かしい光を身にまといっている。彼女の傍らには、若年に受けた教育の影響は老年においても心を保つことを暗示する若木が添えられている。彼女は右手に杖を構えるが、それは鍛錬こそが心を養うのに必須のものだからである。

リチャードソン

『イコノロジー』より「教育」(一七七九)

ここでは、「教育」の擬人像の持物として杖を持つ女性、本を読む子ども、そして若木が挙げられている。<sup>29)</sup> 比べると女性が杖こそ持っていないものの、題扉の図像は本を読ませる女性、本を読む子ども、樹木と類似要素を備えており、基本的には上記の記述及び図像に近いものであるということが伺える。この類似はノートの草稿において一層顕著である。

同様の図像はリーパの初版には存在しないが、十七世紀中頃から存在している。一六四五年にヴェネツィアで出版された『イコノロジー』では、正面からの描かれ方ではあるものの、先述した婦人、子ども、若木の三要素はこの頃から保持されている(挿図6)。<sup>30)</sup> この伝統はヨーロッパ全体に普及していたようで、一六九八年にアムステルダムで出版された『イコノロジー』においても、同様の類型

に属する画像が「教育」とされている(挿図7)<sup>31</sup>。また、このような画像伝統は、十八世紀においても一定以上の規模で十分存続していたようである。正確な制作年代は不詳だが、ユベール・グラヴロ(Hubert Gravelot, 1699—1773)とシャルル・ロシヤン(Charles Cousin, 1715—95)が十八世紀中頃に編纂した『イコノロギア』においても「教育」を表すために同様に、婦人、子ども、若木の三要素を備えた画像(挿図8)が使用されていることからそれが伺える。<sup>32</sup>

ブレイクとこの画像伝統とのつながりを考えるに際し、グラヴロの名は注目に値する。グラヴロは一七三二年から四四年にかけて渡英し、シェイクスピアの戯曲に挿絵を施すなど、イギリスにおけるフランス美術、特に挿絵や版画の普及に大きな影響のあった人物である。その意味で、グラヴロの編纂したこの本はイギリスにおいても強い影響力を持っていたと考えられる。グラヴロは一七七三年に死亡し、ブレイクの銅版画師としての徒弟修行期間が一七七一年からであるため、そこに直接的なつながりを見ることはできないが、グラヴロがイギリスの版画・出版界に与えた影響の大きさからして、意識しなかったことはいないだろう。

一八一〇年頃のものと考えられるブレイクの芸術論である『公衆への訴え』(Public Address, ca.1810)の中で、ブレイクはグラヴロについて、「グラヴロウがかつて私の師匠のバサイアに言った…」<sup>33</sup>と自分の師匠とグラヴロが知人であったかのように述べた上で、自身の芸術論の根拠付けに使っている。この記述が仮にブレイクによる創作を含むとしても、<sup>34</sup>ブレイクは少なくともグラヴロのイギリス

における影響力の大きさを意識した上で自己の正当化のために名前を持ち出したということは言える。これは、ブレイクがグラヴロの影響力を意識していたということだろう。

また、実際『無垢の歌』より前年、ブレイク自身がこの人物像と類似した画像を、「教育」を表す擬人像として使用している例が存在している。『自然宗教はない』(There is No Natural Religion, ca.1788)のa本、「要旨」に当たる部分(挿図9)がそれである。『自然宗教はない』a本は、年紀が入っていないが、技法的に見てまだ「彩飾印刷法」に成熟していないように見受けられる点から、『無垢の歌』の制作以前、一七八八年頃に彫版されたと考えられている。<sup>35</sup>この画像に注目すると、女性、本を読む子ども、そして近くの樹木などは歴史的に使用されてきた「教育」の擬人像と共通するものを多く持っている。

問題になるのは画像的意味である。ブレイクが他の画像を取り入れる際には、形だけを取り入れ、意味を取り入れていない可能性が往々にしてある。<sup>36</sup>しかしながらこの場合、テキストの方に目をやると『自然宗教はない』の「要旨」では“Education”の文字が文中であるにもかかわらず大文字で始められひととき目立つように書かれている。

### The Argument

Man has no notion of moral

fitness but from Education

『自然宗教はない』 a本「要旨」より本文書き下し

この「要旨」に賦された挿絵の中央の人物像が、「教育」の擬人像に由来するものであり、このテキストの中でもひとときわ目立つ語の一つである“Education”の語を表しているという意見は、イーヴスや潮江宏三氏などの論者により述べられている。<sup>(38)</sup>このことからブレイクが伝統的な教育の擬人像をそのまま「教育」の観念を表すために用いていた可能性は高い。であるならば、「教育」の擬人像をその図像源泉に持つと考えられる『無垢の歌』の題屏も、同様に「教育」の観念を含意していると見るべきであろう。

#### 四 「教育」の位置づけ

では、この「教育」が題屏であることにはどのような意味があるのだろうか。以下では、同時代やブレイク周辺における教育の位置づけについて見ていくこととしよう。

一七五五年に出版されたサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』では、教育という語は次のように定義される。

教育と訓育は、習慣と知覚対象によって、善悪や真偽の判断を速やかにかつより良く下せるよう人間の本性たる理性を形づくるための手段である。

ここでは、教育というものの定義が、善悪の判断及び理性という側面から語られていることが見て取れる。

ローレンス・ストーンは、一六九三年にロック (John Locke, 1632—1704) の『教育に関する考察』が刊行されて以降、中産階級の子どもに對し啓蒙的な目的で教育を施す需要が増えたことを指摘している。<sup>(40)</sup>先に述べたジョンソンのサークルは思想的にはロックの影響の強いものであったとされる。<sup>(41)</sup>実際、ウールストンクラフトは一七八七年出版の『女子教育論考』において、「ロック氏の方式によるならば両親はその情愛を抑制しなければならない」と述べると、ロックからの思想的影を露呈している。<sup>(42)</sup>そのためか、このような教育の定義はブレイクにおいても同様に見られる。

一七八八年前後においてブレイクが「教育」に関して言及した例としては、先に取り上げた『自然宗教はない』 a本の「要旨」が存在する。『自然宗教はない』は、内容的には、十七世紀頃からイギリスで唱えられはじめた自然宗教論に對する反対意見の表明である。<sup>(43)</sup>潮江氏は「自然宗教」や「理神論」といった話題は、これらが彫版された当時にはすでに思想的なインパクトを失っていた問題であり、同じ頃に彫版されたと見られる『全ての宗教は一つである』(All Religions are One, 一七八八)を含めた一連の作品群は「時代に對する生々しい批判というよりは、むしろ個人的な信条告白になっていると見た方がいい」と指摘している。<sup>(44)</sup>

その『自然宗教はない』の「要旨」では次のような言明がなされ

ている。

人間は教育から以外には、道徳的適合性なる概念を持つことがない。自然のままでは彼は単に感覚に従う自然の器官である

ウィリアム・ブレイク

『自然宗教はない』 a 本「要旨」より（一七八八）<sup>(45)</sup>

ここでブレイクは教育というものに関して、「教育から以外には、道徳的適合性なる観念を持つことはない」としている。裏返せば、「教育」というものが人に「道徳的適合性」を与えるものとして語られているということになる。これが一七八八年という『無垢の歌』の制作年代に非常に近い時期におけるブレイクの「教育」に関する定義であった。

『自然宗教はない』は、題名の通り自然宗教論に反対の立場をとっている。ブレイクはロックの経験論が自然宗教論の温床となったとして、ロックに対する反感をしばしば顕わにする。<sup>(46)</sup>そのため、この言明も「道徳性を与える教育」に対しアイロニカルな視点を盛り込んだ上で書かれている可能性が高い。ここで強調しておきたいのは、ブレイクが後年「教育」の「道徳性付与」という側面に関してはそのままに受け入れ、むしろその性質ゆえに、「教育」を悪として語っていったという事実である。

「教育」という語が直接でてくるわけではないが、類似表現として、『天国と地獄の結婚』(*The Marriage of Heaven and Hell*, ca.1790—1793)の「地獄の格言」では「改良(improvement)は

真つすぐな道をつくる。しかし改良のない曲がった道こそが、天才の道だ<sup>(47)</sup>と述べられている。また、『サー・ジョシユア・レノルズ著作集』への書き込み」(Annotations to Sir Joshua Reynolds's "Discourses", ca.1802)においては、美術アカデミーでの教育について語るレノルズに反対して「私は言う好みと天才は教え得る(teachable)または獲得し得るのではなくて我々と共に生まれるのだ」<sup>(48)</sup>との書き込みがされている。これらにおいては、「改良」「矯正」という性質が「天才(genius)」ないしは「個性」との対立項として否定的意味合いを持って語られている。ここで注目しておきたいのは「矯正」「束縛」という性質である。このような性質は「善悪の弁別」ないしは「道徳律の付与」の否定的側面として『天国と地獄の結婚』や『天国と地獄の結婚』などで表明されたブレイク<sup>(49)</sup>の思想中に、生涯にわたって出てくるものでもある。これは、ブレイクの中で道徳律の持つ否定的側面が「教育」という観念と結びつき続けていたことを示唆している。そして何よりこのような「教育」の否定的側面を、ブレイクが「教育」の「道徳性付与」という性質と共に語りなおしている例が存在する。

ヘンリー・クラブ・ロビンソン(Henry Crabb Robinson, 1775—1867)によると、一八二五年にはブレイクは教育について

教育の必要など我々にはない。私はそれを悪事(wrong)だと思つ。それは罪悪(sin)だ。それは善悪を知る知恵の木の実を食べる(eating of the tree of knowledge of good and evil)ことに等し。

と述べている。

この記述は、それがブレイクによる直接のものではないにせよ、彼の肉声を伝えるものとして、晩年の彼の教育に関する論法を知る手がかりになるだろう。まず、ブレイクは教育について「悪事」(wrong)なことは「罪悪」(sin)と述べている。このことは、彼が「教育」に関して否定的な観念を持っているということを示していると言える。また、「罪悪」と述べるに当たって、ブレイクはその罪の内実を「善悪を知る知恵の木の実を食べる」ことに喩えている。善悪の認識を原罪に喩え非難する論法は、一七九八年頃になされたとされる「ベーコンの『随筆集』に対する書き込み」(Annotations to Bacon's "Essays", ca.1798)においてすでに見られる<sup>51</sup>。理性的な善悪の弁別を否定する思想及び論法は、ブレイクに早くからあったものと言えよう。

もちろん、この記述は一八二五年のものであるため、このときのブレイクの論法のみを持って『自然宗教は存在しない』が彫版されたと思われる一七八八年前後、および『無垢の歌』の題扉の年紀に示された一七八九年におけるブレイクの用語法を同定しようと試みるのは非常に危険なこともかもしれない。しかしながら、初期から晩年にかけて、ブレイクが教育を「道徳性付与」とそれに伴う「矯正」「束縛」という否定的側面から語っていることは重要視できよう。また、一七八九年前後から、ブレイクが教訓的な児童書出版に

熱心な出版者と、仕事上密接な関係になり始めたことも、注目に値する。

先に述べたように『無垢の歌』はその詩的形式上、当時の多くの教訓的と言って良い児童書との類似性を持っている。また、一七八〇年代、遅くとも一七八八年以降のブレイクの周辺には教訓的な児童書の出版に熱心な出版者が存在し、その人物と仕事上親密な関係を築いていた。題扉の、「教育」の擬人像の伝統を明確に引いた図像は、このような当時のブレイク周辺の環境の中で機能するものに見えるべきだろう。

ブレイクは『天国と地獄の結婚』などの著作の中で「教育」に類する語を「矯正」や「抑圧」として否定的側面から語っていくことが多くなる。また、同時代の「子どものための聖歌」との形式的な相同性に比して、『無垢の歌』の内容に教訓性が見られないことから、同時代の児童書で表明された「旧約的な道徳形態」へのアイロニカルな反応が含意されているという解釈があることは先にも述べた。題扉に「教育」を置いていることから、同時代の児童書を意識していることは間違いない。しかしながら、ここで「教育」というものが自体が題扉という重要な場所に設置されているということは注目すべきことだろう。繰り返すが、これは、同時代の児童書の「道徳性付与」という側面に対応して置かれたと考えられる。ならば、この題扉は、「児童書の道徳形態」よりむしろ「道徳を与えようとする態度」を問題として意識し、反応した上での産物であるということになるだろう。

## 終わりに 『無垢の歌』の解釈をめぐって

『無垢の歌』全体の主題を考察する上では、口絵と序詩が重視されてきた。その解釈においては、『無垢の歌』の基本的な主題は、ブレイク独自のヴィジヨナリーな世界観にあるとされる。同時代との関係においては、同様の詩的形式を持つ当時の児童書の「旧訳的な道徳観」への対抗が企図されているともされるだろう。ただし、題扉も同じく詩集の冒頭に存在する以上、その意味を見逃すことはできない。題扉は「教育」を著し、当時の児童書の「道徳性付与」という啓蒙的な目的に反応しておかれた可能性が高い。題扉の図像が、「教育」を連想させ同時代の児童書との関係性を示唆するという点では、本論の結論はリンカーンの意見に一致する。ただし、その関連性は、題扉の図像の「本を読ませる姿勢」や「木の実の存在」から連想される漠然としたものではなく、擬人像の伝統に根ざし、明確に「教育」という観念を意識してのものである。それを題扉に描いたということは、ブレイクが『無垢の歌』において「教育」のあり方の問題を意識したということであろう。このことは、『無垢の歌』の他の詩編においてもこのような問題意識があることを示唆するものであるが、それについて語ることは現在の筆者の能力を超えているため、ここではその可能性を指摘するに留めて結びとしたい。

## 注

(1) 本論文ではブレイクの作品のテキストに関しては KEYNES (G.) ed., *Blake*

*Complete Writings: with Variant Readings*, London, 1966. (以下 *Blake Complete Writings* と記す) のものを参照した。また、日本語訳に関しては、

基本に梅津濟美訳『ブレイク全著作』全二巻、名古屋、名古屋大学出版会、一九八九年(以下『ブレイク全著作』と記す)のものを参照した。

(2) KEYNES (G.), WOLF (E.) ed., *William Blake's Illuminated Books: A Census*, New York, 1953, pp. 9-18, 50-69.

(3) BLUNT (A.), *The Art of William Blake*, London, 1959; rev. ed., New York, 1974, pp. 47-49 についてはこのテキストと挿絵の関係における相違を制作年代の相違と考えている。

(4) KEYNES, WOLF ed., *op. cit.*, pp. 9-18, 50-69

(5) PINTO (V. de S.), 'William Blake, Isaac Watts, and Mrs. Barbauld', PINTO (V. de S.) ed., *The Divine Vision: Studies in the Poetry and Art of W. Blake*, London, 1957; rev. ed., New York, 1968, pp. 64-87. 引用箇所は p.78

(6) *Ibid.*, p.78 より引用。

(7) ENGLAND (M. W.), SPARROW (J.), *Hymns Unbidden: Donne, Herbert, Blake, Emily Dickinson and Hymnographer*, New York, 1966, p.56.

(8) SHRIMPON (N.), "Hell's Hymnbook: Blake's Songs of Innocence and of Experience and Their Models" in DAVIS (R. T.), BEATTY (B. G.) ed., *Literature of the Romantic Period, 1750-1850*, Liverpool, 1976, pp. 19-35.

この論文では、基本的に『無垢と経験の歌』として述べられているが、『無垢の歌』単体においても子どもたちのための聖歌のパロディとして、上記の文脈の中に起きえることが示唆されている。

(9) *Ibid.*, pp. 19-23.

(10) LINCOLN (A.) ed., *Songs of Innocence and of Experience* (Blake's Illuminated Books Vol. 2), London, 1991, p.142-143.

(11) 「失われた少年」「乳母の歌」「聖木曜日」の三篇。

(12) 一般的には一七八八年は『自然宗教はない』及び『全ての宗教は一つである』

- の制作年と考えられるため、『無垢の歌』の彫版年は一七八九年とおかれる。
- (13) 潮江宏三『銅版画師ウィリアム・ブレイク』京都書院、一九八八年に詳しい。また、Bentley, Jr. (G.E.), *Blake Records* (2nd), New Haven, London, 2002, pp. 18-84 (なおつても) のようなブレイクのあり方が詳しく記述されている。
- (14) Bentley, Jr., *op.cit.*, pp. 813-824, Appendix IV 'Engraving by and After Blake 1773-1831' 及び ESSICK, *William Blake's Commercial Book Illustrations*, London, 1992, pp. 16-138 から作成。
- (15) Bentley, Jr., *op.cit.*, pp. 18-84.
- (16) TYSON (G. P.), *Joseph Johnson: A Liberal Publisher*, Iowa, 1979, pp. 81-84.
- (17) *Ibid.*, p.81-84. 子供の教育に関する議論や児童書ではウールストンクラフト『女子教育論考』(*Thought on Education of the Daughters*; 1787) などの教育論の他に、バーボールド夫人『子供たちのための散文の賛歌』(*Hymns in Prose for Children*; 1781) サラ・トリマー『駒鳥物語』(*Fabulous History; 1786*) ウールストンクラフト『実生活物語』(*Original Stories from Real Life*; 1788) などの教訓色の強い児童書などがある。また先に挙げた出版物の内、ボニーキャッスルの地理教材(一七八二)と、ウールストンクラフト『実生活物語』第二版(一七九一)にはブレイク彫版の挿絵が賦されていた。ついでついで付け加えておく。
- (18) MALKIN (B. H.), *A Father's Memoirs of His Child*, London, 1806; rpt., Washington D.C., 1997, pp. xviii-xlviii. ついでの論考は「シモンソン博士による devotional poetry への論評は、ウォッツやウォルターの不自然な構成に精密に当てるはまるものにせよ、普遍的で必然的の真実であるかどうかであるかどうか、一考の余地がある」との下りがある。挙げられている著者の名からして、ついで devotional poetry と呼ばれているものは、当時の子どもたちの聖歌であると考えられる。
- (19) TOWNSEND (J. R.), *Written for Children: an Outline of English-Language Children's Literature*, London, 1965; rev. ed., Harmondsworth, 1974, pp. 27-36.
- (20) WATTS (I.), *Divine Songs Attempted in Easy Language for the Use of Children*, London, 1715; rpt., London, 1971. 'Preface' より。訳文は筆者拙訳。
- (21) TYSON, *op.cit.*, pp. 81-84. サラ・トリマーは一七八〇年代にシモンソンを出版元として『駒鳥物語』など、いくつかの子どもたちの本を出版している。内容的には教則的なものから物語的なものまで多岐にわたる。また一七八七年にはシモンソンは彼女の児童書の広告パンフレットを出している。
- (22) TRIMMER (S.), *A Comment on Dr. Watts's Divine Songs for Children*, London, 1789; 東京大学教育学部図書館所蔵。In-House Reproduction を参照。なお、この著作は Buckland, J.F. and C. Rivington, T. Longman, T. Field and C. Dilly を出版者として出版された。
- (23) *Ibid.*, p.iii.
- (24) BARBAULD (A.L.), *Hymns in Prose for Children*, London, 1781; rpt., New York, 1977, pp. iii より引用。
- (25) *Ibid.*, pp. v-vi より引用。
- (26) WOLLSTONECRAFT (M.), *Original Stories from Real Life*, London, 1788; rpt., New York, 1977, p. x より引用。
- (27) *Ibid.*, p. v より引用。
- (28) PHILLIPS (M.), *William Blake: Creation of the Songs from Manuscript to Illuminate Printings*, Princeton, New Jersey, 2000, p.14 を参照。また、ERDMAN (D. V.) ed., *The Note Book of William Blake: a Photographic and Typographic Facsimile*, Oxford, 1973 にあつても同様の見解が示されている。
- (29) 資料としては RICHARDSON (G.), *Iconology*, 2vols., London, 1779, vol.1, p.82, plate xxxix (IDC Microfische) を参照した。ブレイクが実際に参照したテクストは定かではなすが、ついででは年代的近さから便宜上このテクストを使用した。

- (30) RIPA (C.), *Iconologia di Cesare Ripa*, (tre. libri.), Venice, 1645 (IDC Microfiche).
- (31) RIPA (C.), *Iconologie ou la science des emblems devises*, Ed., BAYDOIN (J.), Amsterdam, 1698 (IDC Microfiche). なお、同じ編者の編纂した『イロノロギア』が一六四四年にパリから出版された。RIPA (C.), *Iconologie, ou explication nouvelle de plusieurs images*, Ed., BAYDOIN (J.), Paris, 1644 (IDC Microfiche)。このパリ版のおうとも同様の図像類型は「教育」の擬人像のついで。
- (32) GRAVELOT (H. F.), COCHIN (C. N.), *Iconologie par figures ou traite complet des allegories*, Paris, n.d. (IDC Microfiche).
- (33) KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, p. 594. 訳文は梅津訳『ブレイク全著作』第二巻、一〇七四頁下段を参照。
- (34) Le BLANC (C.), *Manuel de l'amatour d'estampes*, 3vols., Paris, 1854-89 及び PORTALIS (R.), *Les dessinateurs d'illustrations au XVIIIe siècle*, Paris, 1877; rpt., Amsterdam, 1970 におけるグラヴロとバサイアの仕事を比較しても、知己となり得るような仕事は見いださしにくいと言ふことを述べておく。
- (35) KEYNES, WOLF, ed., *op.cit.*, pp. 1-7.
- (36) このような事態の例として《アルピオンの岩山のアリマテアのヨセフ》の第二ステート(一八〇九—一〇頃)においてはシケランジェロに由来する人物像が、アリマタヤのヨセフとしてブレイクの神話に即して読み替えられていることが挙げられる。
- (37) KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, p. 97 及び FAVES, ESSICK, VISCOMI, *The Early Illuminated Books (Blake's Illuminated Books Vol.3)*, London, 1993 参照。改行は原文のまま。
- (38) 潮江宏三「ブレイクの彩飾本—テキストと図用の関係をめぐる一—」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』(三十三)、一九八八年、一—十七頁。及び FAVES, ESSICK, VISCOMI, ed., *op.cit.*, p. 37 におけるこのような解釈が示されている。
- (39) JOHNSON (S.), *The Dictionary of English Language*, London, 1755; rpt., New York, 1967. 訳文は筆者拙訳。なお、このテキストには頁番号は与えられていない。
- (40) STONE (L.), *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800*, London, 1977, pp. 254-299 を参照。
- (41) FAVES, ESSICK, VISCOMI, ed., *op.cit.*, pp. 21-41 所収の『自然宗教はなに』及び『すべての宗教は一つである』(All Religions Are One; ca. 1788) に関する「序文」を参照のこと。この時期のジョンソンのサークルに関しては TYSON, *op.cit.*, pp. 58-91 も参照。
- (42) WOLLSTONECRAFT (M.), *Thought on the Education of Daughters*, London, 1788; rpt., Oxford, 1994, pp. 11 参照。訳文は筆者拙訳。この本もまたジョンソンの出版者から出版されている。また、この本で述べられた思想が『実生活物語』の序文においても響いているとの指摘を三宅興子が行っている。三宅興子『イギリス児童文学論』翰林書房、一九九四年、六一頁。
- (43) 自然宗教とは人類に共通に備わっている「共通観念」に基づいて、宗教や宗派の違いを越えた万人に同意可能な宗教を発見しようという考えであり、「英国理神論の父」とも呼ばれるエドワード・ハーバードの宗教論にも多くの部分が多い。ハーバードの自然宗教論については WALKER (D. P.), *The Ancient Theology: Studies in Christian Platonism from the Fifteenth to the Eighteenth Century*, London, 1972. ブレイクと自然宗教論との相同関係に関しては江口飛鳥「ウィリアム・ブレイクにおける理性と想像力」『東京大学宗教学年報』(二十二)、二〇〇四年、七一—八四頁を参照のこと。
- (44) 潮江宏三「ブレイクの彩飾本」一—十七頁を参照。引用文は5頁。
- (45) KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, P.97 参照。訳文は、梅津訳『ブレイク全著作』一五九頁によった。
- (46) 江口飛鳥、前掲書において詳しい。
- (47) KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, P. 152 参照。訳文は梅津訳『ブ

レイク全著作』二八五頁による。

- (48) KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, p. 474 参照。訳文は梅津訳『ブレイク全著作』八四六頁による。

- (49) 『天国と地獄の結婚』において「どんな徳もこれら十戒を破ることなしにはあり得ないのだ、イエスは全身これ徳であった、そして衝動から行動したのだ、規則からではなくて」(KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, p. 158 参照。訳文は梅津訳『ブレイク全著作』第一卷二九四頁下段による)と述べており、十戒的な道徳の持つ束縛的な側面を否定的に描いている。

- (50) HUDSON (D.) ed., *The Diary of Henry Crabb Robinson: an Abridgement*, London, 1967, 1825, 12, 10 部分を参照。訳文拙訳。

- (51) KEYNES, ed., *Blake Complete Writings*, pp. 396-410 参照。当該箇所は p. 397。

#### 【附記】

この論文は、二〇〇七年一月に修士論文として提出し、同年五月の美術史学会全国大会で口頭発表を行った内容に、一部加筆修正を加えたものである。指導を行ってくださった、百橋明穂先生、宮下規久朗先生、貴重な助言をくださった、木村三郎先生、坂本満先生、潮江宏三先生（五十音順）に、こゝで感謝を述べたい。

安永幸史（やすなが・こうじ）

二〇〇五年 神戸大学文学部卒業

二〇〇七年 神戸大学文学研究科修士課程修了

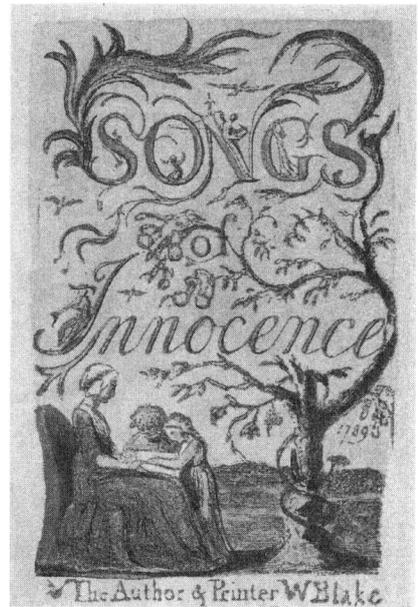
神戸大学文学研究科博士後期課程在学中



挿図3 ブレイク『無垢の歌』  
題扉（年紀部分拡大）  
1789年頃 レリーフエ  
ッチングに手彩色



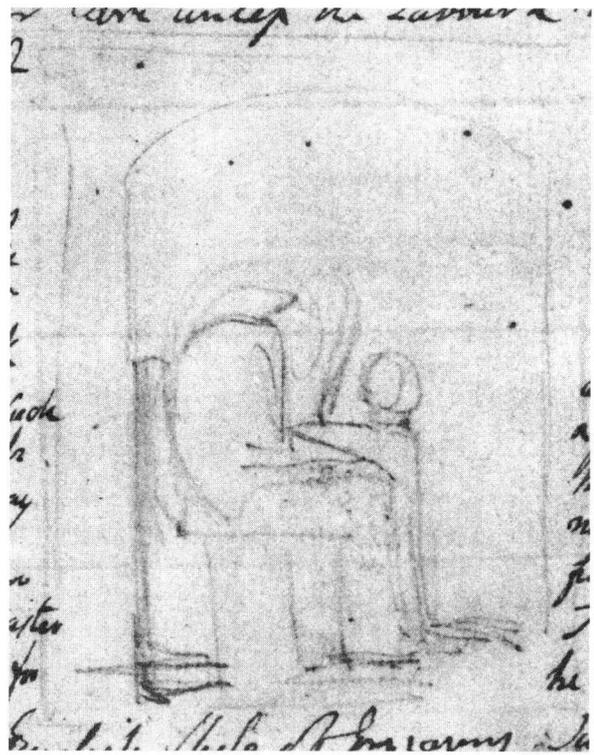
挿図2 ブレイク『無垢の歌』  
口絵、1789年頃彫版  
(1795年頃印刷、バイエ  
ルン州立図書館本)、レ  
リーフエッチングに手  
彩色、17.6×12.3cm、ミ  
ュンヘン、バイエルン  
州立図書館



挿図1 ブレイク『無垢の歌』  
題扉、1789年頃彫版  
(1795年頃印刷、バイエ  
ルン州立図書館本)、レ  
リーフエッチングに手  
彩色、17.7×12.4cm、ミ  
ュンヘン、バイエルン  
州立図書館



挿図5 リチャードソン『イコノロジー』1779年よ  
り「教育」(IDC Microfische)



挿図4 ブレイク「稿本手帳」N55（部分）、年代不  
詳（1787-93）紙にペン、ロンドン、大英図  
書館

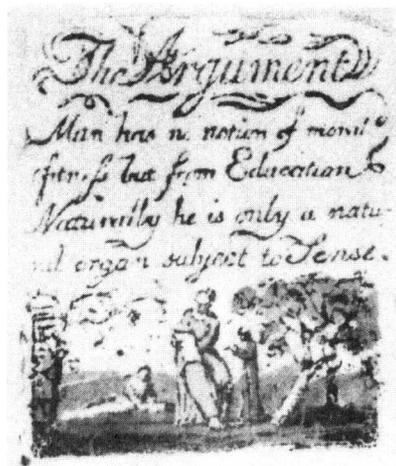


挿図7 リーパ『イコノロギア』1698年（阿姆斯特  
ルダム版）より「教育」（IDC Microfische）



挿図6 リーパ『イコノロギア』1645年（ヴェネツ  
ィア版）より「教育」（IDC Microfische）

The Argument  
Man has no notion of moral  
fitness but from Education  
Naturally he is only a natu-  
ral organ subject to Sense



挿図9 『自然宗教は存在しない』 a本「要旨」1788年頃彫版（1794年  
頃印刷、コピーG）、レリーフエッチングに手彩色、5.4×4.0  
cm、ニューヨーク、ピアポイント・モーガン図書館（左は原文  
書き下し）



挿図8 グラヴロ、コシヤン『イコ  
ノロギア』年代不詳（18世  
紀中頃）より「教育」  
（IDC Microfische）